Osaka University Knowledge Archive

Title	胸腺腫の組織学的分類に関する研究 : 胸腺上皮細胞の分化度に基いた分類法
Author(s)	谷岡, 恒雄
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33413
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【43】

氏名・(本籍)	谷岡恒雄（たにおか つねお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 5808 号
学位授与の日付	昭和57年10月6日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**胸腺腫の組織学的分類に関する研究** **ー胸腺上皮細胞の分化度に基いた分類法ー**
論文審査委員	(主査) 教授 川島 康生 (副査) 教授 神前 五郎　教授 北村 旦

論文内容の要旨

〔目　的〕

胸腺腫は本来，悪性の potentiality を有するといわれている。しかるに胸腺腫の良，悪性を決定する従来の形態学的認識法にはなお満足すべきものがない。

著者は人胎児胸腺上皮細胞を電顕的，光顕的，に観察し，その分化度と胸腺腫上皮細胞の分化度とを対比することにより，胸腺腫の悪性度分類法を設定し，さらにこの分類法と臨床像との関連性につき検討せんとした。

〔方法ならびに成績〕

胸腺上皮細胞の分化度の検索には，15体の人胎児を用い，胎生8，9，12，15，17週の胸腺を光顕的，電顕的に観察した。細胞分化の過程は，電顕的には上皮細胞の organella の発現，そして週令に伴う変化としてとらえた。光顕的には構造的変化を加味して電顕像と対比し，細胞分化の過程を観察した。

胸腺腫は，昭和30年から昭和55年の26年間に教室において切除された100例を用い，上記の細胞分化の形態学的基準から，4つの分化度に分類した。

電顕材料はカルノフスキー，オスミウム酸の二重固定後アルコール脱水，プロピレン親和後エポン包埋を行った。超薄切片を作成しウラニウム，鉛の二重染色後，日立電顕H300にて観察を行った。

(A) 胸腺上皮細胞の分化度に基く胸腺腫分類法の設定

(1) 胎児胸腺上皮細胞の，organella の発生，発育，また胸腺組織の機能的成熟度からみて，胎生8週，12週，15週，17週以後の4つの段階的な発育時相が分別しえた。

(2) この時相との形態学的類似性から，胸腺腫を未分化型，低分化型，中分化型，高分化型の4型に分類した。その各頻度は各々5例(5%)，16例(16%)，68例(68%)，11例(11%)となった。

(3) 中分化型はその細胞形態により，polygonal cell type 49例，clear cell type 6例，及びspindle cell type 13例の3亜型に分類した。

(B) 分化度分類と臨床像との相関

(1) 胸腺腫の性比は男性56%と男性優位であった。罹患年令は45±14 (S. D) 才であったが，未分化型では58±8 (S. D) 才と，母平均に比べて有意に高令に偏していた ($p<0.05$)。

(2) 周囲臓器への浸潤は症例の38%に認められ，未分化型では全例に認められた。浸潤の有無により各分化型の分布には有意の差が認められた ($p<0.025$)。

(3) 転移は症例の17%に認められた。転移の有無により，各分化型の分布には有意の差が認められた($p<0.01$) 転移率は，高分化型0%，中分化型13.2%，低分化型18.8%，未分化型100%であり，分化度が低いほど転移率が大であった。

(4) 腫傷死は症例の18%に認められた。腫瘍死の有無により，各分化型の分布には有意の差が認められた ($p<0.01$)。腫瘍死率は高分化型0%，中分化型14.7%，低分化型18.8%，未分化型100%であり，分化度が低いほど腫瘍死率が大であった。

(5) 手術より死亡に至る平均月数は，中分化型69±66 (S. D) カ月，低分化型14±10 (S. D) カ月，未分化型5±3 (S. D) カ月であった。中分化型と低分化型間 ($p<0.05$)，中分化型と未分化型間 ($p<0.02$) には有意の差が認められた。

(6) 根治的切除例における腫瘍死率は高分化型0%，中分化型9.6%，低分化型7.7%，未分化型100%であった。また姑息的切除例における腫瘍死率は高分化型0%，中分化型31.2%，低分化型66.7%，未分化型100%であった。根治，姑息いずれの切除でも，腫瘍死の有無により，各分化型の分布に有無の差が認められた ($p<0.025$)。

(7) 5年生存率（実測生存率）は高分化型100%，中分化型92.5%，低分化型44.3%，未分化型0%であった。各分化型間で化較すると，高分化型と低分化型間 ($p<0.05$)，高分化型と未分化型間 ($p<0.001$)，中分化型と未分化型間 ($p<0.001$)，低分化型と未分化型間 ($p<0.05$) で有意の差が認められた。

〔総　括〕

(1) 胸腺上皮細胞の分化度に基いて胸腺腫を高分化型，中分化型，低分化型，及び未分化型の4群に組織学的に分類した。

(2) 周囲臓器への浸潤の有無，腫瘍死したか否かにより，腫瘍の各分化型の分布には有意の差が認められた。また，生存月数及び実測生存率は腫瘍の分化度と有意の関連性を証明しえた。

論文の審査結果の要旨

著者は人胎児胸腺上皮細胞を光顕的，電顕的に観察し，その分化度と胸腺腫上皮細胞の分化度とを対比することにより胸腺腫の組織学的な分類法を設定したが，本分類法に従えば，胸腺腫の臨床像と有意の関連性がえられた。本論文は基礎及び臨床の両面から考えて，非常に価値の高い論文であると認める。